

巻頭言

いのち、それは天地宇宙との調和である

高橋成輔*

「神様、私はこれから全身全霊をもってこの方のために尽します。しかし、私にはどのような結果が出るのか前もって知る力がありません。あなたは全知全能です。結果はあなたがお見通しの通りです。私の思考や腕前が未熟なところは私の責任です。この方の責任ではありません。この方の生命を奪って私を罰するような考えはお止め下さい。この方を救えるのはあなたです。あなたの意思のままに私をお使い下さい。」

人として、医師として、また専門医として生命（いのち）と向き合うとき、論理的にも技術的にも、絶体絶命の場面に遭遇することがある。この危機的状況を如何にして乗り越えるかを考えるとき、自分の能力を客観的・普遍的・論理的根拠に基づき、広義のEBMよろしく評価して、自分にできる医療技術を駆使してベストを尽くす。しかし、結果がどう出るか予知することはできない。このようとき私は神に祈る。

循環。ひとたび生を受けて死ぬまでの間、片時も休むことのない循環。血液。リンパ液。脳脊髄液。身体を構成している体液が全身あるいは局所的に質・量・分布・動態の面において、適正であることを評価する物差しはどこにあるのだろうか？ 心臓・血管系をはじめとする循環の場で、如何なる必然で様々な修飾が加えられるのだろうか？ 絶え間なく変化する生命現象を評価するとき、何が確実で、何が不確実で、何が無意味な指

標であるかを判断することは難しい。

制御。閉鎖系の生命はいつかは亡びる。この掟にどこまで逆らえるのだろうか？ ホメオスタシスは神の意思なのだろうか？ その許容範囲は如何にして知ることができるのだろうか？ 神の御業としての制御機構をおもんばかり、その意思に従っているつもりで前へ進むのがよいのだろうか？ それとも、自分がこうあるべきと信じる指標をもとに無理やり方向を定めるのがよいのだろうか？ 神経とは本当に神の意思を伝える径なのだろうか？ 神の御業の一部を知って何を制御しようというのか？ 様々な程度の侵襲因子に曝される生体を守ろうとする自分の仕事には喜びも多いが、悩みや悲しみも多い。

ポストゲノム時代の幕が開け、テーラーメイド医療の実現が夢をもって語られている。ゲノム機能が詳細に解析されることによってその人が持っている先天的な素因と後天的因子による修飾の程度が読めるようになれば、各個人の侵襲に対する生体反応の許容範囲を正確に予知できる可能性がでてくる。それを受けて創薬の分野においても、恒常性維持機構の賦活化や活性化をはかる薬の研究開発が著しく進歩することが予想される。

こころして学ばざる身の悲しさよ、
こと起きて知る法の厳しさ

*九州大学大学院医学研究院麻酔・蘇生学